2009年12月12日
JASLAパネルディスカッション
日本における第二言語習得研究の軌跡と今後の展望

音声習得研究の視点から見た第二言語習得研究

早稲田大学
大学院日本語教育研究科
戸田貴子
toda@waseda.jp
http://www.gsjal.jp/toda/

概要

- 音声習得研究の動向と仮説・モデル
- 最新の研究成果
- 今後の展望

日本語教育現場の声

- 上級・超級レベルの学習者でも、発音には母語のクセが残ることが多い。
- 発音指導をしても、思うように成果が上がらないし、次の授業に来ると、学生の発音が元に戻っている。
- 子供のときに学習を開始した場合は、ネイティブのような発音になるが、大人になってからでは、無理ではないだろうか。

→学習者の発音には、母語の影響が強く現れるという印象が持たれている。

音声習得研究の動向

- 言語的要因に着目した研究
  母語干渉、母語転移、有標性など

↓

- 学習者要因・社会的要因に着目した研究
  学習開始年齢、学習者の意識、学習方法、学習環境、教師の意識、教育方法など

母語干渉　1

- 研究の源流

We assume that the student who comes in contact with a foreign language will find some features of it quite easy and extremely difficult. Those elements that are similar to his native language will be easy for him and those elements that are different will be difficult (Lado 1957).

母語と目標言語の音韻体系の相違に着目し、対照分析研究の視点から数多くの学習者音声の分析が行われた。

母語干渉　2

- 研究の視座

→学習者音声の特徴を理解するには、L1とL2の音韻体系の対照が不可欠である。

例：中国語母語話者による日本語の有声・無声破裂音の習得は、L1にない有声破裂音のほうが、L1にある無声破裂音より難しい。

母語転移　1

- 研究の源流
- Transfer is not simply interference. (Odlin 1989:26)

L1の体系がマイナスに作用する負の転移だけではなく、プラスに作用する正の転移もある。

7

母語転移　2

- 研究の視座
- →「干渉」という概念だけでは把握しきれなかった学習者音声の特徴も記述。
- 例：中国語の上海方言には有声破裂音が存在するため、北方方言話者と比較して日本語の有声破裂音の習得が早い。

8

有標性　1

- 研究の源流
- 含意の法則　(Implicational Law)

言語獲得、失語症、言語音の生起頻度において、「基本（無標）→複雑（有標）」という過程が共通しており、複雑なものの存在が、より基本的なものの存在を含意する。(Jakobson 1968)

- 有標性弁別仮説（Markedness Differential Hypothesis）(Eckman 1977)

9

有標性　2

- 研究の視座
- → L2音声習得における母語の影響と有標性に着目。
- 例：中国人日本語学習者にとって有声破裂音はL1と異なる項目であり、かつL1より有標であるため、有標性弁別仮説では無声破裂音より習得が困難であることが予測される。

10

中間言語音韻研究　1

- 研究の源流
- Interlanguage Phonology (Tarone 1978/1987:79)

１）母語転移（L1 transfer）、２）第一言語獲得プロセス（L1 acquisition process）、３）過剰一般化（overgeneralization）、４）近似化（approximation）、５）回避（avoidance）

- Ontogeny Phylogeny Model (Major 1987)

11

中間言語音韻研究　2

- 研究の視座
- →学習者言語は可変性を伴い、L1ともL2とも異なる学習者独自の言語体系であると考え、習得プロセスの解明を目指す。
- 例：英語話者の促音習得（Toda 1994）
- 知覚目標設定（L1干渉）→知覚範疇化→知覚判断境界値の自己修正（L2発達）
- 生成においては、NNS独自の方略で促音・非促音の対立を実現

12

類似音習得モデル　1

- 研究の源流
- L2がL1に類似した音は「similar」, L1に存在しない新音は「new/foreign」という知覚範疇に入る。L1と「similar」であると知覚された類似音は、実際は目標言語とは異なるにも関わらず、L1に存在する音として範疇化されてしまうため、新音より習得が困難である (Flege 1981)。

13

類似音習得モデル　2

- 研究の視座
- →「母語と類似した音は習得が早く、異なった音は習得が遅い」という従来の考え方とは逆の方向性を示した。
- 例：中国語母語話者には、日本語の語中無声破裂音はL1における類似音の無気無声破裂音として知覚されるため、新音である有声破裂音より習得が困難である。

14

変異性モデル　1

- 研究の源流
- 日本人ESL学習者と英語母語話者集団の音声変異との共通性　(Dickerson 1975)
- タイ人ESL学習者による母語における社会言語学的傾向のESL中間言語への転移 (Beebe 1980)

15

変異性モデル　2

- 研究の視座

→ L1 の変異性モデル（Variability Model）をSLAに導入し、学習者の誤用は学習プロセス上の変異形（variants）であると考えた。L1音声変異と同様にL2学習者の音声変異にも規則性があることが示され、L2音韻の可変性における体系性を立証した。

16

最新の研究動向と研究方法

- 言語的要因に着目した研究

母語別、レベル別学習者による音声の録音・分析、聴取実験（定量的研究）

- 学習者要因・社会的要因に着目した研究

フォローアップ・インタビュー、質問紙調査（質的研究）

17

学習開始年齢

- 学習開始年齢と発音習得度には相関関係があり、早期に学習を開始したほうが習得には有利である。
- しかし、臨界期を過ぎて学習を開始した場合でも、母語（母方言）を問わず、学習次第でネイティブレベルの発音習得は可能であることが示唆された（戸田 2008）。

18

学習者の意識・学習方法

- 大人になってから学習を開始し、ネイティブレベルの発音習得を達成した学習成功者には、複数の学習成功要因の相互作用が見られた（戸田2008）。
- 例：日本語音韻の学習、発音の意識化、豊富なリソースの活用、音声化した発音学習方法の実践・継続、音声に対する関心と高い到達目標、インプット洪水

19

学習環境

- 日本国外の外国語学習環境下の場合中国人学習者による有声・無声破裂音の音韻対立は極めて習得困難であり、L1の負の転移が顕著に現れ、中級から上級にかけて化石化・退行化が見られる。
- 一方、日本国内の第二言語学習環境下では、上級段階で習得する者が現れる（山本2009）。

20

教師の意識・教授法

- 中国人学習者による有声・無声破裂音の習得は、日本語教育機関の教育方針、日本語教師の言語教育観（音声言語重視・文字言語重視）、教授法などにも影響を受ける。
- また、教師側の言語教育観や教授法の差異が学習者の学習方法にも影響を及ぼし、L1音韻の正負転移を促進・抑制する（山本2009）。

21

音声習得研究のテーマ

- 1）日本語学習者の音声の知覚と生成
- 2）複合領域研究（例：談話と音声、待遇表現と音声、文法と音声など）
- 3）音声習得と学習者要因・社会的要因
- 4）音声習得とバイリンガリズム
- 5）音声習得とアイデンティティー

22

22

音声教育研究のテーマ

- 6）音声教育方法の検討（例：教室分析、評価研究、教授法など）
- 7）音声教育用教材の開発・研究
- 8）学習者音声データベースの開発・研究
- →上記のもの以外についても、研究の余地が多分に残されている。

23

23

研究と教育について

- 研究と教育の関係については様々な考え方があるが、最も重要なのは自らが問題意識を持ち、どのような立場に立って研究教育活動を行うことに意義を見出すかということ。
- 教育現場で培った問題意識を研究によって検証し、研究成果を教材開発等に活かして教育現場に還元することも可能である（戸田2009）。
- 現場では、理論的基盤や実証研究に裏付けられた音声教育実践が求められている。

24

まとめ

- 従来の音声習得研究における仮説・モデルには諸説あるが、その大半が言語的要因に着目したものであった。
- 近年、言語的要因だけではなく、学習者要因・社会的要因も視野に入れた音声習得研究が行われるようになった。学習者音声の実態把握のためには、これらの要因が無視できない。
- 今後の研究の可能性

25

参考文献

- 戸田貴子(2009)「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142号、日本語教育学会 p47-57.
- 戸田貴子編著(2008)『日本語教育と音声』くろしお出版
- 戸田貴子(2007)「日本語教育における促音の問題」『音声研究』11巻1号、日本音声学会 p35-46.

26

- 戸田貴子(2004)『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク.
- 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7巻2号、日本音声学会 p70-83.
- 山本富美子(2009)『第二言語の音韻習得と音声言語理解に関与する言語的・社会的要因』ひつじ書房.

27

参考文献

2.1　母語干渉（L1 Interference）

Lado, Robert (1957) *Linguistics across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers*, Chapter 2 How to compare two sound systems, 9-50. Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.

戸田貴子（2001）「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』第 4 号, 150-168.

水谷修・鮎澤孝子・前川喜久雄編（1991）『日本語の韻律に見られる母語の干渉－音響音声学的対照研究－』＜D1 班＞平成２年度研究成果報告書

－－－－－－－－－－－－－－－－（1992）『日本語の韻律に見られる母語の干渉（２）－音響音声学的対照研究－』＜D1 班＞平成３年度研究成果報告書

－－－－－－－－－－－－－－－－（1993）『日本語の韻律に見られる母語の干渉（３）－音響音声学的対照研究－』＜D1 班＞平成４年度研究成果報告書

2.2　母語転移（Language Transfer）

Odlin, Terence (1989)*Language Transfer: Cross-Linguistics Influence in Language Learning*, Cambridge University Press, Cambridge. Chapter 7 Phonetics, phonology, and writing systems, 112-128.

王伸子（1999）「中国語母語話者の日本語音声習得を助ける中国語方言」『音声研究』第 3 巻　第 3 号，36-42.

Hakuta, Kenji (1976) A case study of a Japanese child learning English as a second language. *Languaeg Learning 26/2*, 321-351.

Hakuta, Kenji (1986) Mirror of Language: The Debate on Bilingualism. New York: Basic Books.

2.3　有標性（Markedness）

Jakobson, Roman (1968) *Child Language Aphasia and Phonological Universals*. Mouton

Maddieson, Ian (1984) *Patterns of Sounds*. Cambridge: Cambridge University Press.

Eckman, R. Fred (1977) Markedness and contrastive analysis hypothesis, *Language Learning 27*, 315-330.

Eckman, R. Fred (1991) The structural conformity hypothesis and the acquisition of consonant in the interlanguage of ESL learners, *Studies in Second Language Acquisition 13-1*, 23-42.

Eckman, R. Fred (1991) "The structural conformity hypothesis and the acquisition of consonant clusters in the interlanguage of ESL learners", *Studies in Second Language Acquisition* 13, 23-41.

Eckman, R. Fred, Moravcsik, A. Edith & Wirth, R. Jessica (eds.) (1986). *Markedness*, New York, Plenum Press

2.4　中間言語音韻研究（Interlanguage Phonology）

Ioup, Gerorgette and Steven Weinberger, Eds. (1987) *Interlanguage Phonology*, Rowley, Mass.: Newbury House.

Tarone, E. Elaine (1978/1987) The phonology of interlanguage. In G. Ioup & S. Weinberger (Eds.), Interlanguage Phonology (pp.70-85). Rowley, Mass.: Newbury House.

鮎澤孝子（1999）「中間言語研究－日本語学習者の音声」『音声研究』第 3 巻　第 3 号，4-12.

Toda, T. (1994) "Interlanguage phonology: Acquisition of timing control in Japanese", *Australian Review of Applied Linguistics*, Applied Linguistics Association of Australia, 17,2, 51-76.

Nagai, K. (1998) "Compensatory Lengthening by British Learners of Japanese" *Japanese Language Education around the Globe* 8, 87-97.

Major, C. Roy (1987) "A model for interlanguage phonology", in Ioup, G. & Weinberger, S.H. (eds.), 101-124.

Major, C. Roy (2001) Foreign Accent. The Ontogeny and Phylogeny of Second Language Phonology. Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.

Major, C. Roy & E. Kim (1996)　The similarity differential rate hypothesis. *Language Learning 49*, 465-496.

2.5　類似音習得モデル（Equivalence Classification Model）

Flege, E. James (1981) The phonological basis of foreign accent: a hypothesis, *TESOL Quarterly15/4*, 443-455.

Flege, E. James (1987a)　The production of “new” and “similar” phones in a foreign language: Evidence for the effect of equivalence classification. *Journal of Phonetics 15*, 47-65.

Flege, E. James. (1987b)　Effects of equivalence classification on the production of foreign language speech sounds. In A. James & J. Leather (Eds.), *Sound Patterns in Second Language Acquisition* (9-39). Dordrecht, The Netherlands: Foris.

劉佳琦(2008).「中国語母語話者における日本語の有声・無声破裂音の混同」『日本語教育と音声』 東京:くろしお出版, pp.141-162.

2.6　変異性モデル（Variability Model）

Beebe (1980) Sociolinguistic variation and style shifting in second language acquisition. *Language Learning 30/2*, 433-448.

Dickerson, Lonna. J. (1974) *Internal and External Patterning of Phonological Variability in the Speech of Japanese Learners of English: toward a Theory of Language Acquisition*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Illinois at Champaign-Urbana.

Dickerson, Lonna. J. (1975) The learner's interlanguage as a system of variable rules. *TESOL Quarterly* 9-4. 401-407.

Dickerson, Lonna. J. (1987) The psycholinguistic unity of language learning and language change. In G. Ioup & S.H. Weinberger (Eds.), 86-100.

３． 最新の研究と今後の展望

戸田貴子（2008a）「大人になってからでも発音の習得は可能か」『日本語教育と音声』第 3 章，くろしお出版，pp. 43-59.

戸田貴子（2008b）「『発音の達人』とはどのような学習者か」『日本語教育と音声』第 4 章，くろしお出版，pp. 61-80.

戸田貴子（2008c）「音声の習得」坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新編『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』第 3 章第 2 節，スリーエーネットワーク，pp. 149-167.

山本富美子(2009). 『第二言語の音韻習得と音声言語理解に関与する言語的・社会的要因』東京:ひつじ書房.